
朱鷺伯爵家の夕陽

吉野水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱鷺伯爵家の夕陽

【Nコード】

N6161Z

【作者名】

吉野水月

【あらすじ】

戦後、間貸しをはじめた伯爵家の日々を令嬢の視点から描く。

甲騎舎WEBページにも転載。

朱鷺伯爵家の夕陽 1

ひどく暑い、ある夏の日のことである。

空襲警報も無く、青い空によく映える銀色のB29の姿もない。

お昼に玉声をラジオから賜るとのことと、家族はもちろんのこと、お付きの人までラジオの前に集まった。ラジオは雑音だらけで、恐れ多くも御上の御言葉は、さっぱりわからなかった。ラジオを聞き終わったあとも、みな顔を見合わせているばかりだった。

軍需省にお勤めの、一番上の兄さまが、難しい顔をしていらした。「敗けたな。これは」

お父さまが、つぶやいた。

みなは静まりかえった。

日本が戦争に負けたらしい。

なんとなく、そんな感じはしていた。同盟国のドイツやイタリアが負け、若い男の人たちが、命を擲っているのにかかわらず、日本の島々は次々と玉砕して敵の手に渡り、ついに沖縄まで奪われてしまった。帝都は連日連夜、B29の空襲にさらされている。焼き討ちされた下町の炎が夜空を照らす様は我が家からも見えた。これで敗けていないと考える方が、いささかおめでたいような気さえしていた。

お母さまが、かすれたような悲鳴をあげた。武家の出身で、尊皇の志篤い、お母さまのこと、さぞやお気落ちされたであろうことは容易にみてとれた。一斉にざわざわと漣のような声が漏れる。

「お茶でも入れてくれ」

お父さまが、お付の人にそう言いつけると、あら不思議、ざわつきはすぐに静まった。

二、三日たつと、すぐに落ち着いた。日本が本当に負けたのだということを、みなが受け入れた。

お父さまは、えらく古くなってしまった紅茶を飲みながら、いつものようにペラペラと薄い新聞を広げてらした。紅茶は勝利に沸いていたころ、南方で分捕ったものが送られてきた時のものだった。

「今度は、いかなるのでしょうか」

「なあに、大したことはないさ。白村江の昔から勝ったり負けたりしてきたわけじゃないか」

「男は島流し、女はアメリカ人のお妾にされるとか聞きましたけれど」

「アメリカ人は、そんなことせんよ。アメリカに喧嘩を売ったのは大失敗だったが、まあ、喧嘩の相手がアメリカ人でよかったともいえるな」

お父さまは悠揚迫らぬ態度である。我が家は、朱鷺家は、代代の公家である。公家、華族といえば、か弱く、おっとりとして、世間知らずな存在とされている。どれも、まあ当たっているが、一つ忘れていことがある。万事に対して異常に冷淡である、という点だろう。人の世のことをなんとも思っていないのである。徹頭徹尾無力のくせに全てを見下したような、突き放したようなふてぶてしさを持っている。お父さまは、まさにその精華であつた。不穩思想の持ち主と憲兵さんにつけられたり、お妾さんが発覚しても、二番目のお姉さまが駆け落ちをしても、実の弟である伯父さまが自ら命を絶つても、ちよつと眉を顰めただけである。

空襲の最中でも茶会やお能をしたりで、さすが、お公家さまは違う、などと言われたりした。

「しかし、御上には申し訳ないなあ」

本当にまじめな顔をする時は御上のことだけだった。

「御上はどうなるのでしょうか。ドイツやロシヤの皇帝のようになってしまふのでしょうか」

「アメリカ人は頭がよいからな。御上には手を出さんはずだ」

私たちは、伝統だとか、歴史だとか減らないものを売って、すま

し顔で、ちゃんと床の間に飾られる。1000年近く、そうやってきた。今度もそうやって切り抜けるのだろう。

「色々と、とられるだろうなあ。屋敷くらいは残したい。だから、間貸しをやるうと思うんだよ。いいと思うんだがね。東京は焼け野原だしな」

「まあ、お父さまが、世間の大家さんのようなことを」

「うん、身元確かな人にだけ貸すのだよ」

そう言っ て仔細らしげに鯨髭をひねった。

お父さまは早速、お付きの人たちに暇を出して必要最低限として、間貸しの準備にとりかかった。

私は女学校の他、外の世界をまったくと言っていいほど知らない箱入り娘である。箱の中に世の中が入ってきてくれるのだから、願ってもない話だった。

年も明けると、数人が入居してくださった。私の家はそれはそれは広く、迷宮のように複雑でいくつもの部屋があった。幼いころ、私は家が世界のすべてと単純に信じていた。

あまり使わない和室には、たいそうな御老人が間借りした。

表向きは書道の先生であるが、弟子もいないし、教室も開いていない。実は政治家の相談役、右翼の黒幕と言われている人だった。

干し柿が化けで出たらきつとこんな感じなのであるうというような風体をされている。意外なほど、細く甲高いお声であった。

御老人の用事は膨大な量の宛名書きや、蔵の中にある難しい本を探して届けることだった。私は書生さんの真似事を仰せ付けられたのだ。御老人は、私の字を見て、いまいち、という顔をされ、時々、書を教えてくださった。指摘はいちいち的確で、すぐに上達したように見えた。それでも御老人の字とは根から違うように思えた。

「字は上手くなるというより、上手く見せることが肝要なのです。

なんでもそうですぞ」

御老人は意味有り気に笑った。

たしかに美人であることより美人らしく見せるほうが重要であるう。

「これから、御国はどうなるのでしょうか」

新聞や、お父さまの読んでいる男の方が読む政治時経済の雑誌を読んでいる私は、賢しげに聞いてみた。畏くも皇居前でデモがあったりして、世情が騒然としているのはなんとなく知っていた。

「ごらんなさい」

古い地球儀をくるくると回して、尺取虫のような指をさつと地球儀の一点におく。日本とアメリカ、それからソ連、北極を通ってヨーロッパへと不気味にすべる。

「次はアメリカとソ連が対立します。そうなると日本が最前線になる。アメリカがソ連と戦うには、帝国陸海軍が必要となるでしょう。すぐに帝国が復活しますよ」

御老人は、得意げだった。

私としてはまた戦争というのは感心しない。なんなら先の戦争に勝てる、いや、勝てはしなくても立派な若い男の人たちをあんなに死なせずにすむ手立てでも考えて欲しかった。この私だって、数度しかお会いしたことのない婚約者が戦死した身でもある。他人ごとのように、ああ、この人と結婚するんだ、と思った程度だったが、御遺族の立派な態度を見ていると冷淡な家の娘でも、さすがに胸だつて痛む。

重々しいはずの御老人がなんとなく軽薄に見えてしまった。

小さいころ、お気に入りだった洋間には、野球選手の方が住み込むことになった。野球は早速去年の秋からはじまっていた。元は特攻隊でいらしたという。戦争の時の話はお嫌いで決してなさらなかった。この野球選手の方は犬を飼っていらして、お庭に犬小屋を作らせた。お母さまは景色が台無しであると呟かれた。この犬、まだ

一歳だというのにえらく大きい。フワフワのモサモサで、まあ、ライオンのような風体である。野球選手の方は、外泊や午前様のお帰りが多く、犬の世話は家の者、特に私がやることになった。名前はなぜかつけていないので、家の者はワンちゃんとか、ワン公とか呼んでいた。

ワン公、庭を駆け回っているので退屈はしないようである。私は芸でもしこんでやれ、と色々やってみたのだが、ワン公、全く言うことを聞かない。ボールを放つてもくわえたまま、どこかに行ってしまう。ただ、吼え声がそれこそ五月蠅いのでお家の用心棒代わりにはよかった。

たまにしか帰っていらっしやらない野球選手の方は、なんだから、いつも怒っているような顔をして、実際に怒っていらして奥様とよく喧嘩をされていた。

この方には野球のルールを教わった。意外と複雑である。私が間違えると「お嬢さん、それは違う。何度も言っているでしょうが」と渋い顔をなされた。

今まで意識したこともない方たちが私のことで機嫌を悪くしたりなさるのは、なんとも不思議であった。何より意外で面白く思えたのは、普通の人は、こうもあからさまに腹を立てるものなのか、ということだった。お父さまが、怒りを露にしたことはないし、お母さまもお怒りの時は静かに怒っていらっしやる。習い事の先生も、叱る時は、「今日はお稽古に身が入らないようですね。もうお帰りなさい」とにつこり笑うのだった。

とにもかくにも、この野球選手のおかげでルールを知り、主要な球団やら選手やらの名前も覚えて、試合のラジオ放送などを楽しめるようになった。

お客様用のこぢんまりとした和室は有名な政治家のお妾さんが借りた。いつも静かに笑っているとても綺麗な方で、私は料理を教えもらった。料理の腕前は本当に大したもので、我が家の御節料理

などを作ってくれる料理人にも全く劣らないような気がした。

私など、今まで包丁などという危ない代物は持ったことがないし火を使ったこともない。手に火傷や傷をこしらえながら料理修行に精を出した。麦飯を炊いたり、鰯を焼いたりするだけで、一騒動だった。それでも継続は力なりで、ほうれん草の御浸しや、鰯や大根の煮付けを作れるまでになった。

最大のお勉強は、お買い物だろう。我が家では、ものを買うということがなかった。届けてもらうか、お付きの人に百貨店まで取りに行かせるかのどちらかだった。買いに行くという言葉自体を使うことが無く、ただ「取りに行く」と言っていた。

空襲にあわなかった下の商店街には、品数が少なく、また閉店している店も多かったが、八百屋には野菜が売っており魚屋にも魚が売っていた。乾物屋というものがあると初めて知った。私はてつきり缶詰の専門店だと思い、そのまま話が進み、頓珍漢なことになって、ようやく気づいた。

「お嬢様は、本当に下々のことをご存知無いのですねえ」と、コロコロ笑われた。でもちつとも嫌な気はしなかった。

お妾さんは本当にいい笑顔でよく笑われる。女の私でさえもいい気分になるんだから、男の方はどんな気持ちになるだろう。黙っていると能面のように薄気味悪いなどと言われる私は、よくよく見習うべきであろう。

お父さまは、時々、アメリカの方をお家に呼ばれた。なんでも色々と故郷へ持ちかえる記念の品を探しにいられているらしい。日本刀や茶器、掛け軸など骨董の類は大人気だった。

骨董をアメリカの方に売り払うなんて、とお母さまは嫌な顔をしていらしたが、所有がアメリカの方に移っても価値が寸毫も減ずるわけではない、身元確かなアメリカの方に売って家宝にでもしてもらった方が、ガラクタと一緒に捨てられたり、価値のわからない闇市場の成金が持つよりいい、と涼しい顔をしていらした。

G H Qの将校さんたちは、たいへんに気前がよく、食料をはじめ、様々なお土産を下さった。御不快のお母さまを除き、残ったお付きの人たちや、御ばあさままで大喜びだった。うちで飼っている白猫のムルまで将校さんの足元に擦り寄る。実に見事な手のひら返しである。ともかくも、よき人、ものくるる人なり、とは、まさに至言であらう。

よいことばかりではない。時々、うちに顔を見せる方々は戦争に負けたのに、にぎわっている我が家で変に物欲しそうな顔をされる。戦争の前は、とても楽しく明るくよい方たちだったのに、なんだか人柄まで変わってしまったようで、私は妙にうそ寒く寂しく思えた。そんな骨董探しの一人、アメリカの將軍の娘さんには、最上のお客様にお泊りいただくお部屋をお貸しした。記者をなさっている娘さんは、日本の古い貴族の家柄たる我が家に大変な興味をもっている。片言の日本語と英語であれこれと私に聞いて回る。その度には大仰に驚き、喜んでくださる。

「オー、ワンダホウ」というのが口癖のようだった。

アメリカの方というのは概して大袈裟な人たちなのだが、こんなに喜んでくれるというのは、こちらでも嬉しくなってしまう。娘さんは私に英語を教えてくださいました。お父さまのアメリカの方への入れ込みようはただ事ではないので、私をアメリカの方にお嫁にやるのやもしれない。それはそれで、面白いかもしれないなども考えた。

本当は物置に近い屋根裏には、まだ若い学者の方がお兄さまの伝で借りられた。すうつと背が高くて、銀縁の眼鏡をかけてらして、とても明るくお笑いになる。なにもかもくすんでしまった中、真っ白な、眩いばかりの白衣を着ていらした。

「先生は何の研究をしていらっしゃるのですか」

「石油です。石油をどこからか持ってくるのではなくて、日本で合成して作る。そうすれば使いたいだけ使えるようになります。今度の戦争も石油が原因なんですよ。その問題が解決すれば戦争もなくなる。世の中を動かすエネルギーがタダになれば、貧乏もずっと減るでしょう」

「まあ、すごい」

あの方は、いつも机の上に紙を広げ、数式に取り組んでいらした。私に化学の知識など無いに等しい。でも、飽きずに数式のお話を嬉しそうにしてくださいました。なんだか、暗く、ガツガツしたようになつて顔つきまで変わってしまった感じの人々が多い中で、ただ一人とても綺麗なお顔をして、本当に眩しい笑顔を見せてくださる。今なさっている研究がうまく運べば、と前置きして、

「いずれ、夜が真昼みたいに明るくなる。美しい夜になります」

とか、

「大きな飛行機で地球の裏側まで誰でも旅行に行けるようになります」

夢みたいなお話も、時々交えてしてくれる。

「これから、どうなるのでしょうか。皆さんが日々の暮らしに困らないようになるには、百年かかる、と、この間、お父さまのお友達がおっしゃってありましたけれど」

「百年ですって。大袈裟な」

カラカラと大笑いなされた。

「何も心配することはないですよ。これから、最も素晴らしく明るい時代になるでしょう。本当に科学が何もかもよくしてくれる、よい時代にお嬢様はお生まれになりましたとも」

こんな世でも、この人の頭の中だけでは、とても明るい明日が広がっていると思うと、なんだか本当に楽しくさえなってしまう。私は折を見てお話を聞きに行った。

ある日、なんだか、珍しくそわそわしてらっしゃった。あまり、斟酌するのは失礼ですぐに席を外せばいいのだが、どういうわけか、その日の私は好奇心に負けてしまった。私に何か話したいと思っておられるみたいだった。

「いや、別にお嬢さんをお願いする筋の話じゃないのだけれども」

「遠慮せず、どうぞ、おっしゃってください」

「実は紅茶が飲みたいのだけれども、どこかで手に入らないでしょうか」

「よろしいですね。私が御用意いたします」

私は有頂天だった。音を立てずに階段を駆け下りる。

居間で何かお話をされているアメリカの方々の大声も、あまりよく聞こえなかった。お付きの目を気にしながら、そうっと台所に入る。

心臓が早く動いているのがわかった。戸棚に忍び寄り、お客様用ではなく、一等、上等なお父さまの紅茶の缶を取り出した。家族は紅茶はひかえていて飲むとしても一番質の悪いものを飲んでいて、ティーポットとティーカップも色々と売り払ってしまった中、もっともよいお客様用のものを取り出す。ガスは朝晩しか使えないので、それ以外は屑を燃やして七厘で湯を沸かすしかない。私が中庭で、そんなことをしていたら、少なくなっただけはいえ、お付きが飛んでくるだろう。そうなってはよろしくないので、朝晩に沸かしたお湯

を入れたお客様用の重い魔法瓶をそうつと持ってくる。不自然に減っていることに気づかれるかもしれない。一度、ティーポットを暖めて、茶葉を入れ、湯を注ぐ。紅茶のいい香りが立ち上る。

ああ、お紅茶って、こんなにいい香りがしたんだ、と今更ながらに思い出す。

かたん、と音がした。

咄嗟に振り返る。

ムルが咎めるような目をして、椅子の上から私を見ていた。夕陽が斜めから差込み、ムルの黄色い目を水晶玉のようににはじき返していた。

私が、ものをこっそりくすねたのは最初で最後であるような気がする。お盆にティーセットを乗せて、滑るように廊下を歩き、階段を上る。待っているあの方のところに一秒でも早く、紅茶を出して差し上げたかった。

廊下でも階段でも誰ともすれ違わなかった。

「お口に合うかわかりませんけど」

「ああ、すみません。わざわざ」

恥らうような、はにかんだ笑顔を浮かべる。一口、ついと本当にお上品に紅茶を御飲みになった。

「とても美味しいです」

「ああ、よかった」

あの方の顔に、夕陽が向こうから差し込んで、とても綺麗に見えた。全てが紅茶の色に浸されてしまったかのようだった。

「お前は、なんだか最近、いいことがあったような顔をするねえ」
ある日の夕方、お父さまは新聞から顔をあげないで、おっしゃった。

「そうでしょうか」

「先生がね」

お父さまは鼻をすすった。

「字が随分上達したとおっしゃっていたよ。アメリカ人のお嬢さんも、英語が上手くなったと言ってたな」

新聞をめくる音だけがする。

「そうだ、今日はあの、なんといったかな、学者さんをお呼びしよう」

時々、御老人や野球選手の方など、間貸ししている方を食事にお招きすることがある。今まであの方を呼ぶことはなかった。だから少々不思議だった。

我が家のお三度（夕食）は慎ましいものだった。鰯の干物に、お浸しに、玄米御飯に、お味をつけ、奈良漬。それでも、食べられない人が多い昨今では贅沢な方だった。ちなみにアメリカの方がられる時は、信じられないくらい豪勢になる。それでも、アメリカの方からすれば、こんなものか、といった程度だろう。

あの方は緊張気味だったが、お父さまは、すぐに打ち解けた様子で、色々とお聞きになる。あの方は私にしてくれたような話を饒舌にいろいろとした。

私たちは黙って口を挟まないでいるのが決まりだった。

「はあ、なるほど、結構なお話ですな」

と、お父さまは、まるでピントのずれた人のような顔と声で、相槌をうつておられる。

「研究のための資金が常に不足している状態なのです。ですので、どなたかにぜひ、支援していただきたいと思っています。完成のあかつきには、出資者の方は莫大な利益を手になさるでしょう」

「我家では何もできませんが、どなたか、紹介しましょう」

お父さまは、あまり気乗りがしない時の声でそう言った。

それから数日、家に警察の方がこられた。

「どうも、なかなか、やり手の人だったらしいねえ」

あの方は、詐欺師であったということを話しながら、お父さまが

食卓で新聞を広げる。

海軍の技術士官さんで人造石油の研究をしていたが、敗戦で職を追われ方々の財閥や貴族や地主にお金を無心していたという。

「うちも危ないところだったじゃありませんか」

お母さまは渋い顔をしていらした。

「どうだろうねえ。本当は違うんじゃないかね」

新聞がカサリと音をたてた。

「別にね。人を騙すような人には見えなかったな」

さすがはお父さまだと思った。私もあの方が嘘をついていたようには思えない。たぶん、自分のやっていることを心から信じていたのだろう。何しろ、いつも、一生懸命に取り組んでいらした。だから、あんなに澄み切った目をしてらしたのだと思う。

「まあ、なんだ、あんまり時代が急に変わってしまったから、ついに行けなくなつて、少々もの狂いじみてしまったのかもしれないよ」

お父さまは常のごとく、人ごとのように呟いた。お母さまは静かに眉をひそめた。

あの方は変わってしまった今の世で、一人、もの狂いとして明るく研究に打ち込んでらした。もの狂いの世では、もの狂いこそ、明るく、綺麗で、真つ当ではないか。

戦争が終わり何年かたった。いよいよ御下賜金も打ち切られ、また、大変な税金をかけられて我が家は手放さざるを得なくなった。時代も変わり、もう公家、貴族といつても誰も尊敬しないばかりか、単なる厄介ものの類になるので仕方がない。生まれ育った屋敷がなくなるのは、たいへんに辛く淋しいものだつた。

でも、復員してきた二番目の兄上がはじめた中華料理屋がかなり成功したので、その裏に一軒家構えて、お父さまとお母さまは、なんとかやっている。野球選手の方が置いていったワン公もまだ元気である。ムルにいたっては化け猫にでもなるんじゃないかというくらい長生きしている。

私は、たとえば新聞社で働きに出た。御老人におそわった習字、アメリカの記者さんに習った英語がたいへん役に立った。仕事はとも楽しかったが、人の伝で、真面目で、善良な極々普通の商社の人と結婚した。お妾さんから習った料理の出番だった。夫は趣味と言えば野球観戦ばかりの人なので野球のルールも教わっておいて損は無かった。

子供も生まれて、その子もすくすく大きくなった。世の中は、戦争に負けたというのに、なぜか気味が悪いくらいに明るくなっていくような感じだった。確かに朝鮮で大きな戦争があったりしたが、御老人が言ったようにまた戦争になったりもしなかった。

あの方が言ったように都会の夜は昼のように明るくなっていったし、飛行機での旅行もはじまった。いろいろあるけれど、世の中全体は、少しずつ明るい方へ、明るい方へと歩みを進めているように思えた。あの方は詐欺師でもなく、もの狂いなどでもなく、ほんものの天才だったのではないのかしらん、なんて思ったりした。

ある秋の日の夕暮れだった。

「お母さま、今日は、とつても夕陽が綺麗」

縁側にいた娘が、はしゃいだ声をあげた。娘には私の家の言葉遣いや礼儀作法などを教えている。「あんまり、お躰けが良過ぎやしないかね」と夫に冷やかされるが、こればかりは譲るつもりはなかった。

「そうねえ」

今日の夕陽も確かにきれいだ。
でも。

あの方の横顔に差し掛けられたあの日の夕陽ほど綺麗な夕陽はなかったと思うのだ。

朱鷺伯爵家の夕陽 2（後書き）

貴族趣味というか、まあ、そんな感じです。斜陽っぽい話、とでもいいたしょうか。もっと色々調べてからの方がよかったですかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6161z/>

朱鷺伯爵家の夕陽

2011年12月20日18時51分発行